

《書評》

Richard Shusterman. *Ars Erotica: Sex and Somaesthetics in the Classical Arts of Love*. Cambridge University Press, 2021.

斐芝允 (ベ・ジユン)

私たちはどのようにして愛の仕方を学ぶのだろうか。自分が属している社会・文化、親を含む大人たち、友人から、愛情を受け止め、模倣することで愛を表現する。愛の中でも特定の相手との肉体的な関係が主となるエロスの愛の仕方はどうだろうか。百年前も、千年前も、その仕方は同じで、ある意味それは普遍的かもしれない。しかしながら、私たちは、風の噂で聞き、肩越しにのぞき、小説・映画のワンシーンから拾い、欲望の歪みが投影されたアダルトメディアを真似し、生物の時間の解剖図からも学ぶ。どれも真正面から性愛に向き合う学びとはいいい難く、その現場に遭遇し身を置かれてやっと暗中模索する。リチャード・シュスターマンの *Ars Erotica* は、性愛の仕方に真正面に向き合い、それが私たちの生の一部であるという、忘れられがちだが紛れもない事実を呼び覚ます。各時代の性愛が物語っているように、性愛は私たちの美の具現であり、その向上のプロセスでもある。

本書は、性愛の美学・哲学的な意味を、各地の歴史における性に関する様々な思想と理論、実践と文学を探索することで問い直そうとしている。ここでの「美学・哲学」は、学問体系という高次の観点から性愛の芸術性や価値を分析、判別、解説するためのものではない。そうではなく、「生き方 (ways of life)」、「生きる技芸 (art of living)」としての美学・哲学である。シュスターマンは忘れられていた哲学の意義を現代に蘇らせようとする哲学の試みとして「身体感性論 (somaesthetics)」を先駆けてきている。本書もその延長線上のものである。

シュスターマンは、美学、哲学に通念的な意味を超える意義を見出しているように、性愛についてもミシェル・フーコーの「性愛の技芸 (ars erotica)」という用語のもと、その意味を見出している。ラテン語 *ars* は *art* を意味し、ギリシア語 *erotica* は *love* を意味する。この不自然な合成語にみられるフーコーの意図をシュスターマンは次のように解釈する。まず、*love* を意味するラテン語の *amor* が、広義的で曖昧であることに対し、*eros* は、愛を意味する4つのギリシア語 (*agape*, *philia*, *storge*, *eros*) の一つとして肉体的な関係の愛をより鮮明に示す。逆に、*art* を意味するギリシア語の *techne* より、ラテン語の *ars* のほうが、創造性、技術、快

などを併せる，より広義的なアート概念を表しやすい．ars erotica は，性行為を含む肉体的な愛に内在するアートへの探求を示すタイトルである．さらにそのアートは，美術館に飾られるファイン・アートに止まらない，人々の生き方の実践で現れるものである．このように，フー

伴う快楽は徹底的に否定され、貞節が徹底的に要求された。そこには性愛の美学はほとんど存在せず、婚姻関係の中の子孫を目的とする性行為よりも、独身主義や禁欲が高い価値を持つとされた。

第4章の中国における性の言説と実践は、その深い歴史ほど豊富な広がりをもせ性愛の技芸に多角的な示唆を与えている。史料や古典に記されている性は、陰陽の調和からなる「道」といった存在論的な次元、養成術として性行為の具体的な指針を記す房中術、一夫多妻の家庭を円満に維持するための家政にまで至る。シュスターマンは、養成を超える自己修養としての性愛の可能性に注目する。性愛を通して目指される調和、前戯、性交、振り返りを通して行われる仕草のタイミングと意識的・儀式的な振る舞い、全ての過程を十分に享受するための慎みを、自己修養として捉えているのである。第5章では、インドの性愛の言説について述べており、目

